

「BD OnclarityHPV」による高リスク型 HPV 9 種判別と細胞診ベセスダ分類の相関性考察

◎入江 光哉¹⁾、白星 美麗¹⁾、大長 竜輝¹⁾、阿部 千夏¹⁾、和田 智呼¹⁾、原田 桂輔¹⁾、宮原 一代¹⁾、東田 正二¹⁾
株式会社 シー・アール・シー 総合研究所¹⁾

【はじめに】子宮頸がんの95%以上は子宮頸部でのヒトパピローマウイルス(HPV)の持続的な感染が原因とされている。性交経験を有する人の大半が生涯一度は HPV に感染し、その約90%は自然免疫により消失するが、一部は持続感染となり良性から悪性まで様々な疾患を引き起こす。特に HPV の遺伝子型のうち16型、18型をはじめとする約15種は子宮頸がんから検出され高リスク型 HPV と呼ばれている。当社は高リスク型 HPV 14 種を16,18,31,45,51,52 型の6種を個別、それ以外の8種を3グループ(33/58型)、(56/59/66型)、(35/39/68型)に判別する簡易ジェノタイプ検査(HPV9種判別)を受託している。今回、過去4年間の検出状況について集計し、細胞診ベセスダ分類との相関性について考察した。【対象・方法】①分析機器：全自動遺伝子検査装置 BD パイパー LT②試薬：BD Onclarity HPV キット(いずれも日本 BD)③方法：9分類、14種類の高リスク型 HPV の有無をリアルタイム PCR 法により検出。④対象：当社に HPV 検査と細胞診を依頼された LBC 検体 18,378 件(2019年4月～2023年3月)⑤検討内容：陽性率、

年代別陽性率、HPV 型別細胞診ベセスダ分類との相関性。

【結果】HPV 陽性率[細胞診 ASC-US 以上]13.3%[10.8%]、年代別では10代が最も高く80.0%[90.0%]、次いで20代30.6%[27.4%]、80代で18.8%[21.9%]となり最も低い50代で7.0%[7.3%]であった($p=0.965$)。HPV 陽性の型別内訳では、多い順に52型20.4%、56/59/66型グループ19.2%、33/58型グループ15.0%、35/39/68型グループ14.8%、16型10.7%、51型8.6%、31型5.6%、18型4.3%、45型1.4%となった。細胞診と HPV のクロス集計は陽性一致率69.4%、陰性一致率93.3%、全体一致率90.7%($\kappa=0.57$)であった。【考察】HPV は10～20代の若年齢層で感染、その後免疫により排除されることが示唆された。また、HPV の型とベセスダ分類の集計においては、細胞異形成の程度と HPV の型とがん進展の関連性について既存の文献と相応する結果が得られた。BD Onclarity HPV キットでの高リスク型 HPV の型判別はがんのリスク評価に貢献し、子宮頸がんの診断補助として有用であると考えられる。

連絡先：092-623-2111